

郷土はんかう

第44号



八王子城下にある北条氏照・中山家範供養墓

目 次

- ◆丹党と中山氏を再考する 高澤 等 2
- ◆飯能の底抜け屋台 小槻 成克 7
- ◆どこまで「奥武蔵」か 加藤 寛之 8
- ◆見学会「大宮の史跡を歩く」 関根 貴志 10

丹党と中山氏を再考する

高澤 等



中山氏家紋(御三家方御附)

郷土史の中の中山氏
飯能市の基礎を作り上げた中山氏の事績についてはまだまだ未解明な部分が多くある。中山氏は平安時代に武藏国を中心に発生した「武藏七党」と言われる武士集団の一つで、中山氏はその中の丹党と呼ばれる集団に属している。民間に伝承する中山氏の来歴は伝説的に語られているが、それは決して事実を伝えているものではない。中山氏の事績を正しく理解することは飯能市の成り立ちの土台とも言える事柄であろう。

日条に「武蔵の國、丹・兒玉の党類確執の事有り。すでに合戦に及ばんと欲するの由その聞こえ有るに依つて、相鎮むべきの旨、畠山の次郎重忠に仰せ付けらる。」と登場しております。丹党の存在は平安時代まで遡る。

飯能市に地盤を置いた中山氏は、武蔵七党の内で丹党というグループに属す加治氏の一族である。『吾妻鏡』建久四年（一一九三）二月九日条に「武蔵の国、丹・兒玉の党類確執の事有り。すでに合戦に及ばんと欲するの由その聞こえ有るに依つて、相鎮むべきの旨、畠山の次郎重忠に仰せ付けらる。」と登場しており、丹党の存在は平安時代まで遡る。

れる。血族としてのリーベー的存在がなく、平均化された在地土豪の結合体で、武装したギルドのようなもので、ゆえに「党」と呼ばれたのであろう。彼らは莊園の管理や御牧の馬産、林業、製鉄など古代より先進的知識が必要となる産業の開発を元手に財を蓄え、やがて私営田を持ち自衛のための武力を備えて武

武蔵七党とは武蔵国周辺を地盤にして興った武士団とされている。本来は血族集団ではなく、職能を母体とした仮想血族集団だったと思

一方で平将門が活躍した時代以降、上方から下ってきた辺境軍事貴族が土着し、在地の武士集団としても枝葉を広げた。その中で最も有力となつたのは桓武平氏の良文流で、秋父を地盤にして秋父氏や千葉氏三浦氏、畠山氏、葛西氏などが出て鎌倉幕府創業に寄与し、やがて全国に拡がつていった。

この秋父平氏一族は明らかに武蔵七党よりも上位身分であり、大きな家臣団を伴つた大名として扱われる。また自衛のために武装した党を持つてゐる。つまり秋父平氏一族と違ひ、武蔵国に繁衍した平氏は公権を守護する辺境軍事貴族に起源を持つてゐる。

日本人に同化した渡来人が多く含まれていたと思われ、大陸由来の職性を長期間保持していた武藏七党の中にも、こうした渡来系の出自を持つ一族が含まれていたと想像できる。

る。

上記した建久四年（一一九三）の丹党と児玉党の間に起きた諍いを、畠山重忠を仲介として調停させたことは、秩父平氏を出自とする畠山氏が丹党と児玉党にとつては直属の上位者であったことが理解でき

丹党の立ち位置
反毛の次二回

丹党的立ち位置

は「将」であり、武藏七党は「兵」であった。

丹党は本当に宣化天皇の子孫か？一般的に中山氏は宣化天皇の血を引く多治比（丹治）氏の子孫とする。これは事実だろうか？丹党は宣化天皇の子・上植葉皇子（かみえはのみこ）の孫である多治比古王を先祖に持つ一族と古くから自称しており、これが広く認知されている。現在において宣化天皇から発する系図が多く引用されており、丹党を語る場合はほぼ前提条件という立ち位置を得てしまつてい

丹党は宣化天皇の子・上植葉皇子（かみえはのみこ）の孫である多治比古王を先祖に持つ一族と認知されている。たゞしその家系については江戸時代から疑義が呈されており、安田元久博士は「もとより信ずるに足りない」とし、江戸時代の『寶政重修諸家譜』では多治比古王命名の逸話など長文で解説しつつ、系図以外の史料ではまったく見出せないとして、結びに「實に信じがたきものなり」と断じている。

確実な史料が存在しない状況で、これら七党の出自を論ずることは慎重に扱うべきであろう。

三沢、小鹿野、滝瀬、小島、岡田、
井戸など多數の家があり、その内の
加治氏から中山氏が分立したとさ
れる。史料上に登場した当初は、
「丹氏」と書かれることが多かつた



丹生神社(飯能)

一方で神代の神皇產靈命（かみむすびのみこと）の五世孫である天道教（あまのみちねのみこと）を氏祖とする、いわゆる紀国造を丹党的（だんじき）とし、丹党的（だんじき）の出自とする系図（諸家系譜）も広く知られているところである。両系図を比較すると、家景（陰）以降、ほぼ同じであるが、それ以前についてはまつたく食い違う。現代に伝わるこの二本の系図は、どちらかが間違っているか、あるいはその両方共が間違っていることは確実である。

一方で宣化天皇氏祖説では、丹治家信が延暦十二年（七九三）、丹生氏に養子として入り丹生總神主家を継ぎ、父丹治家義に丹生明神が追号されたとされるが、丹生都比売神社ではそのような事実は認めていな
い。

もし宣化天皇後裔多治比氏説が正しければ、そこに紀姓説の系図を創作するメリットはないであろう。一方で紀姓説が正しければ、宣化天皇後裔とする系図は家格を上昇させることになり、系図を創出するメリットは大きいにある。もしさらに低い身分を出自としていたなら、その両方にメリットがあるだろう。系図の多くは同様の欲求の元に家格を上昇させることを意図して創作されていることを勘案しなければならない。

とができる。しかし『丹党系図』は『続日本紀』に登場する人物は出てくるが、『日本後紀』『日本三代実録』に出てくる多治比一族は一人も登場しないのである。これは系図を作成した者が『日本後紀』『日本三代実録』を見ていなかつたことで、その間の人物については創作せざるを得なかつたものと解釈できる。また古くから指摘されているが、系図に登場する飛鳥・奈良時代の人物に「家隆」「家範」など中世で用いる諱が付けられており、この点においても系図の信用度は極めて低いと云わざるを得ない。

宣化天皇を氏祖とする系図を見てゆくと從三位中納言に叙せられ

た多治比廣成（？～七三九）までの
者は実在が確認できるが、その子と
いう家隆以降の人物は実在を確認
できない。

以前、当会で『武蔵七党系図』に収められている丹党系図には致命的な欠陥があることを指摘した。それは多治比廣成以降の実在人物が系図に登場しないということである。実際の多治比一族は廣成時代以降の人物も『日本後紀』『日本三代実録』の中で、その活動を多く見るこ

比企能員で、いざれも藤原氏と平氏の出自の者である。

上記 10 人の人物とてその出自にまつたく疑惑がないというわけではないが、鎌倉御家人には官職を賜るに足る姓・出自を持つ者が少なく朝廷と相対する幕府を成立させて権威付けを急ぐ頼朝にとつて、御家

人の出自の低さや無教養ぶりは惱みの種であつたことが想像される。このことからも任官の可能性がある御家人には、官職を得るにふさわしい姓を名乗るよう家系の改竄が暗に求められた可能性があり、家系仮冒の歴史は鎌倉幕府が積極的に関わることで始まつたのではない

の家系では三河守を得ることがで
きなかつたことを物語つてゐる。翻
つて鎌倉御家人も、官職を得る機会
が訪れることに備えて、家系を改竄
しておく必要に迫られたと考えら
れる。

以上のことを踏まえても、丹党が
宣化天皇を氏祖とした多治比氏（丹
治氏）であることを無条件に前提と
して語ることは躊躇せざるを得な
いのである。

あらためて丹党の職性と信仰

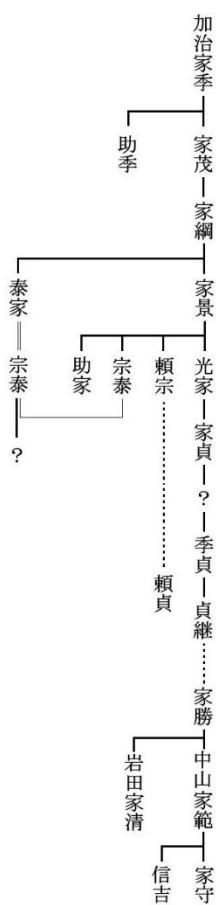
例としてあげられるのは毛呂氏の場合である。毛呂季光は頼朝創業の近臣として準一門として扱われた。『吾妻鏡』には「毛呂の太郎藤原季光国司の事。

これ太宰權の師季仲卿の孫なり」とあるが、年代的に見ても孫というのは無理があり、系図を見るとそれ以前に数代にわたって丹党的な家と通婚している。しかも太宰權師藤原季仲の母を丹党中央村時房の娘としているなど、身分差も居住地も無視したまったく信用できない内容で

ある。これは頼朝の近臣として、豊後守任官のために家系を偽つたと考えざるを得ない。しかもこの操作は毛呂氏自身が望んだわけではなく、おそらく頼朝側から上意下達で家系の修正を求められたのだろう。

また加治氏は入間川から得た砂鉄を元に製鉄を家業とし、入間川左岸に点在した柏原鍛治を支配したが、その柏原鍛治には荒井（新居）、岡、豊田、入子などの名字があつた。阿須から仏子にかけての入間川は採算点である含有率 0.5% をはるかに超える砂鉄を有しており、中には含有率 5 ~ 6% と採算点の 10 倍を超えて いる場所もある（入間市博物館紀要 14）。秩父地方発祥の丹党が加治郷に進出して いた背景には、こ

加治・中山氏系図



『飯能市史・通史』では『吾妻鏡』に登場する中山次郎重実、四郎重政、五郎為重などを挙げて丹党に属する者と書かれている。しかし『桓武平氏諸流系図』（越後国奥山莊史料集）に「秩父十郎武綱—渋屋基家—平三大夫重家—中山次郎重真（ママ）、弟渋屋庄司重国」とあり、『吾妻鏡』に登場する中山氏は飯能の中山氏、山氏とは無関係であることが解る。つまり鎌倉時代から飯能の中山氏

しかし中山の名字は戦国期に至るまで史料上はまったく確認できない。中山勘解由家範（一五四八）（一五九〇）は「加治勘解由左衛門吉範」を称しており、中山氏を称したのは早くても家勝（？）（一五七三）の代、確実なのは家範の代と考えられる。

中山氏が江戸幕府に提出した家譜『寛永諸家系図伝』によると、「元は加治を称し、のち中山に住するにより中山と号す。いつれのときあらたむることをしらず」とあり、『寛政

丹党の諸家は屋敷地に隣接して丹生神社を勧請していることは夙に知られている。また加治氏はその名字の音訓に拵るものか、棍紋を用いる諫訪神社を奉斎することもあつたようである。

際に隨兵として登場する加治次郎に比定されている。加治家季の嫡流は家茂が継いで、野田村（元加治）の円照寺付近に居館を設け、系図上では家季の子助季が現在の飯能市中山に居を定めて中山氏を興したことになつてゐる。

うした砂鉄を求めて來たと考えて間違いないであらう。丹党諸氏は何

が存在していたというのは誤認と云うことになる。

重修諸家譜』では「十三代の孫家勝にいたり同郷中山村にうつり住せしより、家号とすといふ」とあり、家譜では一族の中山移住を家勝の代としている。ただし中山家範館址が発掘されない限り、中山移住時期や廃絶時期など年代感は未詳である。

中山氏の鍵を握る加治豊後守貞繼

中居の宝蔵寺は加治氏の館跡と伝わる。宝蔵寺の開基は加治豊後守貞繼で、その位牌が残る。また宝蔵寺には大石駿河守重仲の位牌も残っている。大石重仲は現在の青木第二会自治館付近に城を築いたといふ伝承があり、武蔵国の守護代であったが、享徳四年（一四五五）に倍河原の戦いで戦傷が元で死亡している。

これほど地位に隔たりのある重仲が中居の加治氏館門前に城を築いていたとすれば、中居にいた加治氏は大石氏と主従関係にあつたと考えてよいと思う。中居の宝蔵寺は下加治に属していたものと思われる。

加治豊後守貞繼は中山家範館のすぐ南にある心應寺も開基しておらず、また智觀寺の住職を出した中山家臣山崎家の系図に「加治豊後新左工門貞繼木裔」とある。

加治貞繼は加治本家が名乗る「豊後守」の受領名を称しており、また

加治本家の系譜の通字（とおりじ）である「貞」を用いている。また中山氏も加治嫡流家が用いた「家」の字を通字としている。

以上のことから、加治貞繼は加治嫡流家と中山氏を繋ぐ直接的な先祖ではないかと思われる。

加治氏の動向

加治豊後守貞繼と大石重仲の位牌が同じ宝蔵寺にあるということは重要で、加治貞繼の動向から、加治氏は大石氏に従い中居・中山に移転したものと考えられる。

元加治の加治氏館は第9代加治豊後守季貞の時代の至徳三年（一三八四）まで用いられたという（入間市博物館紀要第12号）。季貞の子が同じ豊後守を名乗る貞繼とすれば、



加治郷地図

元加治の居館退去と、中居・中山での加治貞繼の登場には時代的に連続性が生じる。

通説では永禄四年（一五六一）六月三日に、北条氏康が加治惣領分百貫文その他を金子氏に新恩として与えていることから、この直前に加治惣領家が上杉に味方したことで滅亡したものと解釈されている。し

かし『関東幕注文』には加治氏は登場しない（勝沼衆として出てくる加治氏は赤沢の加治氏である）ことから、加治氏が上杉氏から離反したとする説は受け入れがたい。つまり永禄年間に滅亡したという加治本家は、至徳年間に他所に移転しており、すでに野田村には存在していないかったと思われる。あくまで私論だが、

中山氏こそ、名字を変えたが加治氏



宝蔵寺

大石重仲の子で、八王子城にいた安祝（安叔）という人物は、父祖の供養のために淨牧院（東久留米市）を開基して、中居の隣の下加治村の土地を寄進している（淨牧院開基については検討の余地有り）。また日高市聖天院にも大石重仲の位牌があるという。大石氏の支配は白子、日高市の平沢方面にまで確認され、加治（中山）氏の領地は大石氏の支配下にあつたことは間違いない。

このことからも加治（中山）氏は、

北条氏照を養子とした大石氏と100年以上にもわたる主従関係であったことが想像される。

歴史的に貴重な宝蔵寺の位牌

因みに中居の宝蔵寺にある加治豊後守貞継の位牌は、私が調べた限りでは、実在した武士の位牌として日本最古の雲首形（うずがた）位牌である。これまで日本最古とされて

いたのは徳島県驚敷町中山の生杉氏所蔵の位牌で、応永二七年（一四二〇）のものである。この位牌は徳島県指定有形文化財に指定されており、このことからも応永三年（一三九六）の銘がある宝蔵寺の位牌が未指定であることは文化的な損失であり、早急に文化財指定が望まれるところである。



加治貞継位牌(表裏)

裏

加治豊後之新左衛門尉丹氏朝臣貞継
應永丙子八月一日更衣坐化壽六十二

表

真寂山翁仁公菴主靈

中山家範も大石氏の家臣から、自然と北条氏照の家臣へ移行することになったが、小田原北条氏の直臣ではなく、あくまでも陪臣という立場であった。

中山の館は史跡として「中山家範館」と名付けられているが、はたして中山家範が成人後に当地に住んでいたかを立証することはできない。家範は八条流馬術を八条憲勝（上杉憲勝）から伝授されている。

憲勝は松山城主の地位を失つて後に北条氏から都筑郡内に300貫文を宛がわれており、幼少の家範は八条流馬術の名手と云われるだけの習得期間を八条憲勝の元（相模国）で過ごしていたと考えられる。この期間は大石家から小田原北条氏に対して証人（人質）として預けられて

この頃の大石氏はすでに新興の北条氏から氏照を養子として迎え、その勢力に吸収され、上杉、長尾とは敵対する勢力下にいたからではない。

この頃の大石氏はすでに新興の北条氏から氏照を養子として迎え、その勢力に吸収され、上杉、長尾とは敵対する勢力下にいたからではない。

大石氏の家臣から北条氏の陪臣に永禄二年（一五五九）に上洛し、関東の差配を将軍から一任された長尾景虎は、翌三年に関東管領就任のため越山して関東に進撃した。すると多くの関東武士がその傘下に馳せ参じ、飯能武士も三田氏の家臣として景虎の幕下に入ったことが『関東幕注文』に記されている。しかし、そこには中山氏の名は登場しない。

中山家範館について
八王子城跡麓にある北条氏照の供養塔と中山家範・信治の墓は昨年破損してしまいましたが、管理する宗関寺（足利崇昭住職）により修復され今年2月26日に開眼供養が行われました。

中山家範も大石氏の家臣から、自然と北条氏照の家臣へ移行することになったが、小田原北条氏の直臣ではなく、あくまでも陪臣という立場であった。

中山の館は史跡として「中山家範館」と名付けられているが、はたして中山家範が成人後に当地に住んでいたかを立証することはできない。家範は八条流馬術を八条憲勝（上杉憲勝）から伝授されている。

憲勝は松山城主の地位を失つて後に北条氏から都筑郡内に300貫文を宛がわれており、幼少の家範は八条流馬術の名手と云われるだけの習得期間を八条憲勝の元（相模国）で過ごしていたと考えられる。この期間は大石家から小田原北条氏に対して証人（人質）として預けられて

いたと考えられるのではないかと思う。

当会副会長
（日本家紋研究会会長、
当会副会長）

飯能の底抜け屋台

小槻 成克

七月一五日に近い週末二日間に開催される飯能夏祭り。見物人がたくさん繰り出す、それは賑やかなお祭りです。皆さんのお目当ては、露天商もさることながら、近隣ではお目にかかる「底抜け屋台」から聞こえてくる迫力あるお囃子でしょう。



天下祭り出場時の底抜け屋台
「山王祭之図」(文政9年/1826)

この底抜け屋台は祭礼屋台の一種で江戸時代半ば、宝暦年間(一七〇〇年代後半)に山王権現と田明神の祭礼である天下祭りに出

底抜け屋台の登場・活躍・衰退 以来江戸時代終わりまで山車と踊り屋台十底抜け屋台セットはお祭りの主役でしたが、明治維新以降お祭りへの幕府援助も無く費用負担が増えたこと、幕府寄りの江戸文化を嫌う明治政府がお祭りに規制を掛けたこと、市街地に電線が架設されたことなどを理由に、震災戦災も重なつて江戸東京市中では山車も底抜け・踊り屋台もほぼ完全に姿を消しました。現在では町神輿が盛んに担がれ、祭りの主役となっています。

また江戸時代より山車とともに底抜け・踊り屋台も川越、土浦、前橋、高崎、佐倉の城下町や八王子、秩父、青梅、熊谷、本庄、佐原、栃木、桐生、藤沢などの商業地にも伝わりましたが、多くは山車祭りだけ存続し、底抜け屋台行事は廃れました。そんな中、今な

現したもので

享保六年(一七二二)、質素儉約を好む將軍吉宗の改革の一環で、

天下祭りも規制され、人気出し物である絢爛豪華な大型屋台が禁止されました。その後、將軍代替わりを経た宝暦九年(一七五九)ごろ、再び屋台を出す機運が高まります。今回は大型屋台の機能を舞

台専用の踊り屋台とお囃子専用の底抜け屋台の二台に分け、禁令に触れない体裁でお祭りに再登場させたのです。

お盛んな飯能の底抜けによる祭事は貴重なものといえます。

飯能での底抜け屋台の拡がり

飯能市内に伝わる底抜けを使つた祭礼行事は、明治半ばに双柳、大正期に三丁目、昭和初期に原町にそれぞれ新久・仏子・高倉・野田など現在の入間市西部から祇園囃子とともに伝播されたようです。主に夏の八坂神社(天王さま)の祭礼行事として「祇園囃子演奏による底抜け曳行」が戦後市街地を中心に氏子町内・囃子団体に伝い広がりました。

同じく七月一五日に近い週末、双柳では八坂神社の祭礼に神輿・山車・底抜けを繰り出し、地区総出で村廻りを行っています。



現代の飯能地方の底抜け屋台(三丁目)

次に屋根廻り前後左右に市松模様の油障子を上に向かって拡げて設える「朝顔型屋根」が大方の底抜けに装備されおり、観客の目を惹きます。一方、双柳・中山の底抜けは山車と同じ唐破風屋根です。新久・高倉・仏子・野田も同様で「ヤグラ」と呼ばれます。

一般的的装飾として、屋台正面に水引幕や注連绳、榊を飾り、腰廻りは腰幕や柴垣で囲み、前梶付の四つ車上に上台を組んで六本もし

底抜け屋台の特色と装い

底抜け屋台の構造上の特色は、文字通り「床板が貼つてない」ことです。当然離子方は屋台の内側を歩いて演奏します。「徒離子・かちはやし」といいます。



屋台に床が無く、
囃子方は地面に立って演奏する（二丁目）

底抜け巡回中はゆっくりで賑やかな「道中離子」を奏します。

「ノウゲノヤマ」「昇殿崩し」「チヤンチャーリーコ」「ナガシ」「カケス」「名栗川小唄」などなど。

一方、門付けや引合せなど底抜けが立ち止まつた際に演奏する「シャンギリ」はテンポの速い激しい発する大音は邪気を払い福を呼ぶと言われています。

底抜け屋台が文化財に指定

現在市域には一丁目・二丁目・
三丁目・四丁目・五丁目・六丁目

三丁目・河原町・宮本町・原町・前田・柳原・中山・双柳・本郷・浅間・平松・中藤・川寺・玉宝寺・矢廬八坂社所有の底抜け一七台が現存し、なかでも中藤・川

寺・玉宝寺・矢廻八坂社を除く一
三団体が順調に祭事活動している
として、令和六年六月「飯能の底
抜け屋台行事」の名称で市の無形
民俗文化財に指定されました。

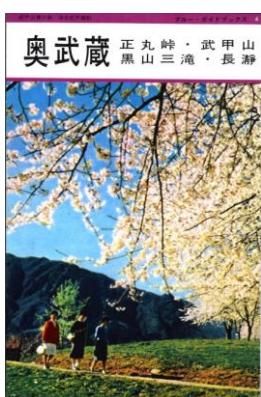
このたびの指定を契機に、地域
遺産として地域活性化(まちづくり)
り、観光資源として地域振興(に

底抜け屋台のお雑子

底抜けでは「祇園囃子」が奏されます。屋台正面に締太鼓二名、脇に大太鼓一名、背面に篠笛、摺り鉦数名を配し歩行演奏します。

大きな大太鼓(打面直径が二尺・六〇cm)を使った威勢の良い調子が特徴で、山車で乗演する屋台囃子のような面踊りは附きませ

(飯能市郷土芸能保存会、
飯能市文化財保護審議委員



「奥武蔵」という概念について、太平洋戦争前から山歩きをしていた大石真人氏は、昭和29年に明文堂が発行した『奥武蔵』に「奥武蔵は登山ないしハイキング地帯による分類の名称である。その範囲並びに名称については種々説があり」と書いています。

和38年に実業之日本社が発行した観光ガイドガイドブックで、「奥武蔵」の大きな文字に加えて正丸峠・武甲山・黒山三滝・長瀬を書き込んでいます。これは編集の才マケではなく、「奥武蔵」の範囲は時代や考え方で異なるからです。

どこまで「奥武蔵」か

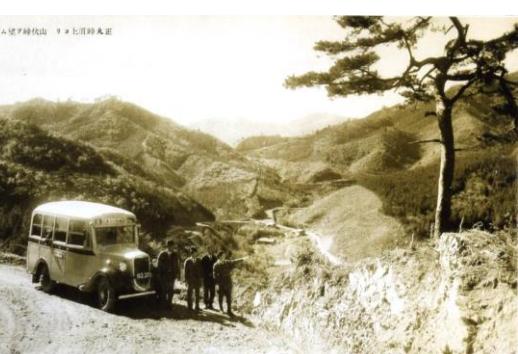
「奥武蔵」という表現は、武蔵野鉄道が吾野延伸（いわゆる吾野線）後に、観光開発で使い始めた言葉です。石灰石輸送が振るわなかつた代りを、観光客増加にかけたのです。石組みで有名な八徳の三吉について貴重な記録をのこした神山弘氏は、1982年に岳書房が発行した『ものがたり奥武蔵』に、「奥武蔵」の名は西武鉄道が付けたというのが本当らしい。なにしろ太平洋戦争の始まる前の半世紀以上昔なので、確実なことはわからぬが、「もと武蔵野鉄道といつては、西武線沿いの山々には未だ総称名が無かつた。そこで奥野電車の宣伝部あたりが命名したこれは、武蔵の国とつたものなのである」と書いています。

「奥武蔵」という単語はだれでも使いそうな言葉ですが、私たちが「奥武蔵」で描くイメージは武蔵野鉄道がつくりあげたといえるでしょう。つまり、一般の住民が日常で使っていた用語ではないのです。戦後でもそうだったようです。有竹修二氏が昭和30年に奥武蔵研究会が発行した『武蔵野漫歩』でさえも「奥武蔵」という詞はまだ一般には通じにくいか、一部登山家、ハイカーの間には、すでに立派に通用語になつている」と書

いています。なお、「奥武蔵」山間部のこととで、吾野延伸によつて終着駅から途中駅となつた飯能街地は「奥武蔵野」の別称を設けて切り離したようです。これは後述の武蔵野鉄道の広報紙「むさしあぶみ」で確認できます。でも今は「奥武蔵野」と呼ばないので、定着しなかつたのでしょうか。

現在も続く奥武蔵研究会というグループは、「奥武蔵」のイメージ形成と範囲に大きく影響を与えた団体です。同会は、太平洋戦争前から吾野線で行ける山間部を踏査し、観光開発の基礎を築いた山登り愛好家の集まりで、戦前には武蔵野鉄道が観光案内に発行していた広報紙「むさしあぶみ」の利用者の集まり、あるいは、武蔵野鉄道と深い関係にあつた「武蔵あぶみの会」（関係者が中心母体でした。大石氏や神山氏もメンバーでした。）の会員が中心で、西川（西川）が世間に良く知られた單語だつたならば、武蔵野電車は新規に「奥武蔵」で広報するのです。西川（西川）を使えば良かつたはずですが、「西川」は一般的な言葉でなかつた、ということでしょうか。

そこで、これまでだつた「奥武蔵」を、主な勧誘範囲は武甲山辺りまでだつたようですが、「奥武蔵」の範囲はそれがどこまでかを語ることなく一挙に拡張したのです。



正丸峠ドライブウェーの開通が奥武蔵を拡張させた（当時の記念絵葉書）

本稿は飯能市立博物館令和6年度特別展「飯能の山をゆく旅の歴史と自然へのいざない」特別展関連講座「奥武蔵つて、どこですか」（令和6年10月27日）を再構成したものです。

（当会会員）

は、これらと一致しているようですが、これで秩父が吾野駅からバスで行ける観光地になつたのです。

す。

最後に蛇足ですが一言。吾野線延伸の時代ならば、「奥武蔵」とほぼ同じ範囲で西川材の「西川」という単語がすでにあつたはずです。

「西川」が世間に良く知られた單語だつたならば、武蔵野電車は新規に「奥武蔵」で広報するのです。西川（西川）を使えば良かつたはずですが、「西川」は一般的な言葉でなかつた、ということでしょうか。

そこで、これまでだつた「奥武蔵」を、主な勧誘範囲は武甲山辺りまでだつたようですが、「奥武蔵」の範囲はそれがどこまでかを語ることなく一挙に拡張したのです。

戦後、昭和20年代になると、また別の動きが始まりました。昭和26年の「埼玉県立奥武蔵自然公園」の指定です。これに先立ち、飯能町・原市場村・名栗村・高麗村・東吾野村・吾野村が「飯能地方自然観光地指定に関する陳情書」を埼玉県へ陳情していますから、この時点で現飯能市の山間部が「奥武蔵」とする意識ができていたことになります。そしてこの指定によつて、目に見えなかつた「奥武蔵」の範囲が「奥武蔵自然公園」としてではあつても地図上で明確になつたといえます。昭和27年には、飯能町（高麗村（東吾野村（吾野村を通過しても正丸峠は超えないコース設定で、いわゆる「奥武蔵駅伝」が始まりました。現在の「奥武蔵」でイメージする範囲の考え方のひとつなのです。

見学会「大宮の史跡を歩く」

関根 貴志



氷川神社参道

6月15日に「大宮の史跡を歩く」と題して、市外見学会を行いました。さいたま新都心駅で降り、氷川神社の約2kmの参道を歩いて境内を目指し、その後は大宮公園を通り、県立歴史と民俗の博物館を見学するという行程でした。

大宮の氷川神社といえど武蔵国の一宮で、埼玉県を代表する神社ですが、飯能地域とは縁が薄いなという感じを個人的に持っていました。とはいっても、当社は埼玉県として武蔵国に歴史に深い関わりがあり、少し広い視野で学んでみようと思いました。

① 氷川神社

氷川氷川神社は、武蔵国に約二百年あるという氷川神社の総本社で、「大宮」という地名の由来にもなっています。延喜式には一座として記載されていますが、江戸期には三

社一寺の神仏習合の形態になつていました。それぞれの神社・祭神・社家は次の通りです。

- ・氷川神社、須佐之男命(スサノオノミコト)、岩井家
- ・氷川女体神社、稻田姫命(イナダヒメノミコト)、東角井家
- ・中氷川神社、大己貴命(オオナムチノミコト)、西角井家

別当寺の観音寺は神仏分離令により廢寺となり、今その場所は「氷川の杜文化館」となっています。祭神が示すように氷川神社は出雲系の神社ですが、同じく須佐之男命を祭神とする八坂神社・須賀神社などとは別の系統です。出雲地方から直接勧請された神社は「須賀神社」「八雲神社」「出雲神社」等と称している場合が多く、かつて牛頭天王を祀っていた祇園信仰の系譜にある神社は「八坂神社」「祇園神社」「津島神社」等と称している場合が多い

一方、氷川神社は出雲から移住してきた人達が祖神を祀つて氏神としたのを始まりとするようです。国造本紀(『先代旧事本紀』巻十)によると、天穗日命(アメノホヒ)の十代後の子孫である兄多毛比命(工タモヒノミコト)が出雲族をひきつれてこの地に移住し、成務天皇の時代に大和朝廷から元邪志国造(むさし)にのみやつこ)として認められ、氷川神社の祭事を行つたとのこと

です。この一族は信濃から山を越えて多摩川の上流に移り(奥多摩には奥氷川神社がある)、やがて川を下つて東京湾から荒川河口に入り、遡上していったようです。別の説では、東山道を通つて北関東から南下した、あるいは信濃から甲州路を通つて西北から入つて来たという説もあります。狭山丘陵周辺にも多くの氷川神社があることを考えると、そちらも移動経路だったかもしれません。

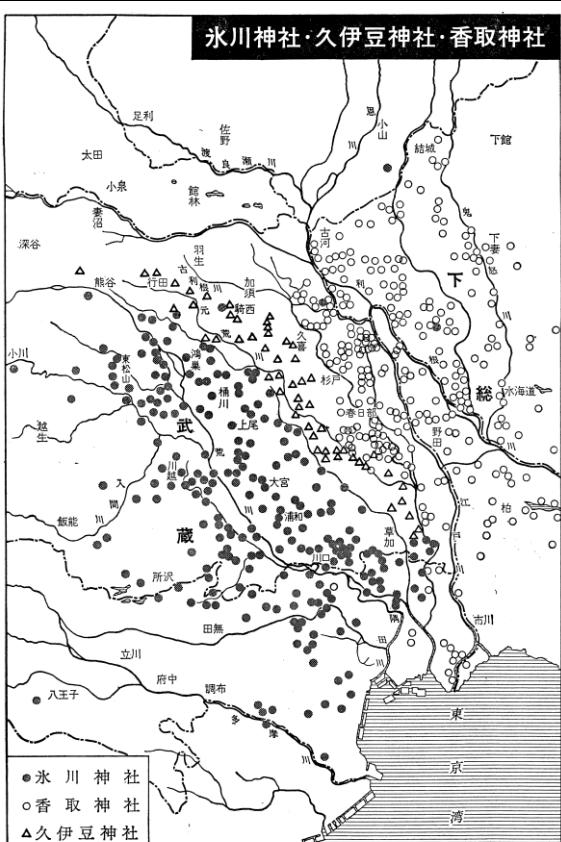
前述した西角井家に生まれ、折口信夫の弟子でもあつた西角井正慶は次のように述べています。

「武蔵国ことに埼玉県は古社分布に興味ある地域であると思ふ。その第一地区は須佐之男命・稻田姫命・大国主命を祭る氷川神社の祭

祀圏、第二地区は経津主神(建御雷神と共に国釀の使者となつた大刀の靈威)を祭る香取祭祀圏、第三地区はその中間地帯をなす久伊豆神社圏と、この分布に考へられることは、宗教社会学的な問題と思ひ、小さな研究を他に發表もしたが、いま一つ諏訪の祭祀圏をも加へなくてはならぬ。

この方は歴史も降り諏訪族の移住もやや明らかであるが、建御名方神を奉斎する神社はここに比企地方に多い」(「出雲と武蔵と」昭和三十三年九月)

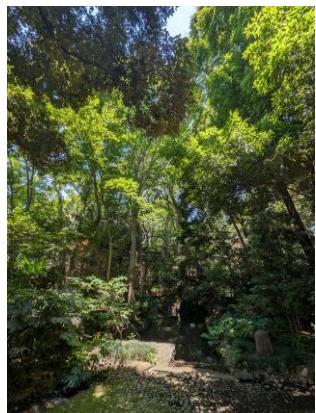
右の図は正慶氏が作成した図で、氷川・香取・久伊豆の三社の位置を示した図になります。河川の流域圏が各社の分布と重なることが見て取れ、氷川神社が荒川流域の東西に



氷川神社・久伊豆神社・香取神社の分布
(西角井正慶「祭祀圏の問題」より)

広がりを見せていることが見て取れます。

一方、飯能近辺にはほとんど存在していませんが、「高麗郡」として考えると白髭神社の祭祀圏というのも想定できそうですし、丹生明神を祀る丹党的勢力圏下だつたということも背景にありそうです。



蛇の池

また本殿西側の奥には「蛇の池」という湧き水があり、立て札には「この神秘的な湧き水があつたために、この地に当社が鎮座したとも伝えられ」とあります。もとは見沼の水神を祀っていたところへ出雲族の神が習合したと考えられています。従つて水川の神は水神的な性格も強いと言えます。例えば川越の砂の水川神社は寛保二年の洪水を契機として創建されたようですが、八岐大蛇は洪水の擬人化という見方もあり、これを征した須佐之男は水害多発地帯である荒川水系の流域でよく祀られた、ということも考えられるかもしれません。



舟遊池

③ 県立歴史と民俗の博物館
大正十年（一九二一）に本多静六博士と弟子の田村剛による水川公園改良計画が作成されています。これをもとに桜の植栽や、舟遊池、運動場等が整備されています。

大正十年（一九二一）に本多静六博士と弟子の田村剛による水川公園改良計画が作成されています。この明治四五年（一九一二）でした。

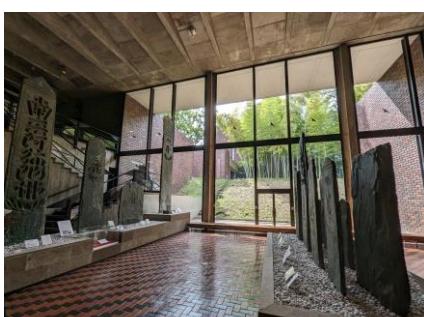
此処はもともと神域だつたところを県内最初の県営公園として明治一八年（一八八五）に建設されたもので、これにより約九万坪あつた神域は約二万三千坪に減つたと言います。

② 大宮公園

境内を後にして公園へ進みます。

日本を代表する建築家の前川國男による設計で、昭和六年の竣工です。奇を衒わず、中心を置かない、環境に溶け込む設計や、外壁の打込みタイル、床の赤と黒の網代張りタイル、打放しコンクリート、地下まで掘り込んで実現した高低差のある空間などが特徴です。

県内の他の前川建築には、浦和の埼玉会館、長瀬の県立自然の博物館があります。（これがきっかけで、後に長瀬の博物館へ行きました）



板碑の展示

全体を通して炎天下の厳しい道を行きでしたが、飯能を他の地域との比較で考えることが多い、有意義な小旅行でした。

（当会会員）

（参考文献）

- ・高澤等『水川神社と武藏國の古代』
- ・原武史『へ出雲vという思想』
- ・昭島市史編さん委員会『昭島市史』

令和六年六月 平成八年七月

昭和五三年十月
・埼玉県立歴史と民俗の博物館『前川建築のすすめ』令和三年十一月
・東京藝術大学とびらプロジェクト『青木淳が語る前川國男』平成二八年七月



堂山下遺跡(苦林宿)の鎌倉街道上道

十二月十四日（土）に会員の茂木章さんに「鎌倉街道 上道」と題した講演を行つていただきました。

今回は高崎城址から狭山市七曲井までの行程について写真を交えながら紹介していただきました。

特に国の史跡に認定された毛呂山町の鎌倉街道上道に含まれる、堂山下遺跡、崇徳寺跡、苦林宿を詳しく説明していただきました。

鎌倉街道 上道
例会の報告

飯能の旗本・大名墓 中山一族
の墓を学び訪ねる

例会の報告



黒田家墓所にて

大名墓を間近で見ることで、歴史遺産であることの貴重さを改めて実感しました。

二月十五日(土)に、副会長の高澤等さんに「飯能の旗本・大名墓 中山一族の墓を学び訪ねる」と題した講演を行つていただきました。前半は市内にある旗本・大名墓などについてご説明いただき、後半は能仁寺にある中山一族・黒田家の墓を一基々々巡つて、どういう人物のお墓なのかを解説していただきました。

飯能郷土史研究会の活動

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員会)

▷インスタグラムの投稿および
情報公開について

飯能市文化財保護審議委員会

◎令和六年度事業報告
△総会
・四月二十一日 四十四回

・四月二十一日(土)
講演会
「飯能の武人」

丹党中三氏を再考する」

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員会)

△総会
・四月十九日(土)
講演会
「飯能市域」所在する
近世大名墓の特異性について」

講師 村上 達哉氏

(飯能市立博物館主幹)

・四月十九日(土)
講演会
「郷土はんのう」

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員会)

・「郷土はんのう」
にについて、イベントで配られた
冊子を撮影した。セミナーで貰ったやつ。
<https://www.facebook.com/groups/1379468322825755>

△例会
・六月十五日(土)
現地見学会
「大宮の史跡を歩く」

講師 小槻 成克氏

(飯能市文化財保護審議委員会
飯能市郷土芸能保存会)

△例会
・六月二十八日(土)
現地見学会
加治神社、智観寺周辺

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、
飯能市文化財保護審議委員会)

QRコード
Facebook

QRコード
郷土はんのう

郷土はんのう 第四十四号

計報

当会理事として永年ご協力
いたきました浅見賢治様が
逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

△例会
・十一月九日(土)
「飯能の底抜け屋敷について」

講師 茂木 章氏
(当会会員、古道を楽しむ会副代表、
毛呂山町歴史民俗資料館 鎌倉街道
ガイドボランティア)

△例会
・十一月二十一日(土)
「文化新聞で読む怪奇事件」

講師 関根 貴志
(当会会員)

・一月十五日(土)

見学会

「飯能の旗本・大名墓
中山一族の墓を学び訪ねる」

講師 高澤 等氏

・一月十五日(土)

見学会

「飯能の旗本・大名墓
中山一族の墓を学び訪ねる」

講師 高澤 等氏</